

### わが家の娘のグローバル体験

フレンズ 帰国生 母の会  
**北村章子**  
Akiko Kitamura

わが家が「3カ月後にベトナムへ赴任」という内示を受けたのは、長女が小3、次女が幼稚園年中の1学期半ばの頃だった。私たちにとっては、結婚後すぐ3年間欧州に駐在して以来2回目の海外赴任だったが、子どもが生まれてからは初めてである。

先進国に夫婦2人で滞在するのと、新興国に家族で滞在するのとでは、私自身の気持ちの持ちようにも大きな差があった。前回の駐在時は、駐在先で自分たちが何を学び、何をどう楽しむかが最大関心事の1つだったが、今回はごく自然なかたちで最優先事項は娘たちの教育問題となり、早速赴任先での学校をどうするかを考え始めた。

#### 日本人学校？ インターナショナル校？

ベトナムに駐在する場合、子どもを通わせる学校の選択肢としては、日本人学校とインターナショナル校がある。わが家の場合は、ベトナムの駐在期間はおそらく3年前後と比較的短めの予定ではあったが、そのままスライドで他国に転勤になる可能性（そしてその国に日本人学校がない可能性）もあり、また帰任後も娘たちが学齢期にあるうちに再び海外転勤になるかもしれないという見通しから、インターナショナル校に通わせることを検討し始めた。

もちろん幼いとはいえ本人の意思も考慮に入れなくてはと思い、「英語で勉強する学校があるのだけどう思う？」と尋ねてみた。当時長

女は、お稽古ごとの1つとして英会話教室に週1度通っていただけだったので、インターナショナル校に入れば大いに苦勞することは目に見えており、幼いながらもそのことは理解できていたようである。

にも関わらず、「おもしろそう！」と非常に前向きな答えが返ってきた。それなら、と親子での苦勞を覚悟しつつも、長女はインターナショナル校に通わせることに決めた。今回はこの長女のことを改めて振り返ろうと思う。

#### 案ずるより産むが易し

3カ月の準備期間は瞬く間に過ぎ、夫を含めて家族全員、下見も皆無の状態で現地入りした。翌日からの家探しと同時に、長女は現地インターナショナル校に登校。下見こそなかなかなかったが、渡航準備期間中に学校と何通もメールをやり取りしていた。インターネットを利用し入学手続きは済ませていたが、学校の様子は分からないまま、不安8割・期待2割の気持ちで学校に到着した。

初日は保護者向けにオリエンテーションでいろいろと説明がありそうだが、そこは見事に簡略化されていた。「彼女が入るクラスは今体育の授業中です」と灼熱しやくねつのグラウンドに案内され、到着すると「ではお預かりします」と笑顔でひと言。不安顔の長女（当然である）を見ると後ろ髪を引かれる思いだったが、このままずっと付き添うわけにもいかず、この場は帰るよりほ